県内アマ囲碁

武藤さん 40年ぶり主要大会V

「年を取っても強くなる」

武藤和義さん

西彼長与町の武藤和義さん(74)が20日から東京・日本棋院で開かれる第36回世界アマチュア囲碁選手権日本代表決定戦の県予選で優勝し、過去最年長の県代表になった。十八銀行を退社後本格的に修業して実力を付けた棋士は「年を取っても強くなることをみんなに示したい」と囲碁文化の普及に意欲をみせる。

今回40年ぶりに県内主要大会を制した武藤さん。囲碁との出合いは長崎大経済学部時代。親友が打っているのを見て「やってみたくなった」。本で勉強し父と毎日対局、「3カ月ほどで追い越した」。大学3年の時には仲間約30人と経済学部に囲碁部を結成、「講義は受けず囲碁に明け暮れた」。市内の深堀囲碁教室に通い、経営者で日本棋院地方棋士だった深堀房雄さんに教示・指導も受けた。

十八銀行在職中は「仕事優先で囲碁はほどほどだった」が、34歳の時に県アマ本因坊戦で優勝。57歳で同行取締役人事部長を退任後、長崎市で活動する関西棋院の高原周二・九段に200回手合わせしてもらうなど、この17年間で1万局打って腕を磨いた。「40年前より強くなった」と言う。

日本棋院県支部連合会の会長や認定NPO法人長崎こども囲碁普及会の副理事長を務めるほか、大学の同窓生、銀行のOBらが集う三つの囲碁教室を主宰。八段格で打つが指導対局が多く、世話方に力を注がねばならない立場。県アマ囲碁最高位戦など主要大会で自身が優勝することはないと思っていたという。

考える楽しさ伝えたい

約50人が参加した世界選手権県予選は決勝まで6回対戦し、うち4回は相手が投了する中押し勝ち。決勝は、先番で7目半勝ちだった。「有力選手が出ていなかったこともあるが、無欲で自然に打ったことが優勝につながった」と振り返る。日本代表決定戦にも無欲で臨むが「自分の力を存分に発揮したい」。

頭脳競技といわれる囲碁の魅力は、考える楽しさにあるという。「勝てばもちろんうれしいけど、勝つために手段を工夫するのが面白い。人と交流もできる」

二つの夢がある。さらに研さんを積んで強くなり、80代で県内主要大会で優勝するのが一つ。もう一つは、囲碁文化がずっと続いていくよう、みんなが囲碁を打ちたくなる環境をつくっていくこと。

(石田謙二)